

以前から予想されてきたことではあるが、介護保険改正に当たり、いよいよ障害予防が中心的テーマに躍りでた。介護予防の充実が国家的に差し迫った課題として表舞台に登場したのである。障害予防の効果を上げる方法論が確立されたゆえというよりも、その高い必要性が先行していることは否めない。関係者にとってはまさに今からが正念場である。幅広いデータの集積と意見の交流により着実にその成果を高めていかなければならない。そのような状況を鑑み、本特集では地域性や特殊性にこだわった理学療法士のかかわりについておまとめいただいた。

■高齢者の介護予防・リハビリテーションの動向—理学療法士に期待される役割（久富ひろみ論文）

2000年4月にスタートした介護保険制度は、5年が経過する中で様々な実態を明らかにし、今まに見直しがなされている。超高齢社会の到来を目前にし、その動向の背景を知り、新たに提供されることになる「新予防給付」と「地域支援事業」の中で、理学療法士はどのような役割を果たせるのか、検討してみたい。

■ヘルスプロモーションと介護予防—積雪寒冷地における転倒予防の推進を中心に（盛 雅彦、他論文）

ヘルスプロモーションから介護予防への行政施策の流れの中で、行政として取り組む要介護予備軍に対する転倒予防活動は、介護予防の中心となるものと考えられる。本稿では介護予防としての行政・理学療法士の集団および個別支援の取り組みを、特に積雪寒冷地特有の凍結路面でのすべりによる転倒予防を中心に紹介するとともに、予防分野への理学療法士の参画の可能性について提言する。

■都市部での介護予防事業の取り組み（栗津原 昇、他論文）

都市部での介護予防の取り組みは多種多様であり、しかも利用対象者の全容把握が行われていない、支援システムが構築されていない、評価が不十分などの課題がある。「総合的な介護予防システムの確立」に向けて、自治体における検討経過や理学療法士の取り組み例を紹介し、理学療法士の役割について、生活機能の改善や介護予防マネジメントに関わることが重要であると述べた。

■地域での介護予防に向けて（備酒伸彦論文）

介護保険は、家庭の中に閉じこめられていた”介護”を社会化するという革命的な成果を挙げた。さて、その見直しの一環として介護予防という言葉が取りざたされているわけだが、介護保険にはもとより「自立支援」という介護予防を含む理念があつて、それによってケア現場では既に様々な取り組みがなされている。そこでこの小論では、ケア現場の過去と現在を顧みながら、これからの地域での介護予防について考えてみたい。

■筋力増強運動による介護予防・リハビリテーション効果（島田裕之論文）

高齢者に対する筋力増強運動による効果をまとめ、介護予防事業において理学療法士が担うべき役割を述べた。Randomized Control Trial による臨床試験の結果、筋力増強運動は高齢者の筋力向上、機能改善に効果的であった。また、筋力増強運動に加え機能的トレーニングの重要性も示唆されており、理学療法士の専門性が必要とされる。